

黒川 侑

侑



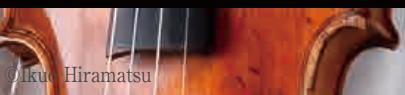
秋元 孝介

孝介

Violin Piano

二人の美意識が響きあう — 黒川侑 × 秋元孝介

独奏の極み、対話の深み



©Ikuo Hiramatsu



©masatoshi yamashiro

黒川 侑 (Yu KUROKAWA) Violin

第75回日本音楽コンクール第1位、聴衆賞他3つの特別賞、第6回仙台国際音楽コンクールで聴衆賞を受賞。これまでにスイス・ロマンド管弦楽団、スペイン国立管弦楽団、東京フィル、京響をはじめ国内外のオーケストラとの共演の他、リサイタル、室内楽はじめ幅広い公演にて好評を博している。

出光音楽賞、青山音楽賞、京都府文化賞奨励賞、岡山芸術文化賞グランプリ等の受賞も多数。「クラシック倶楽部」「題名のない音楽会」等メディア出演も多い。

久末航氏との「ブラームス:ヴァイオリン・ソナタ全集」を含む2枚のCDの他、25年には「バッハ:無伴奏ヴァイオリン・ソナタ集(仮)」をリリース予定。

京都市立芸術大学非常勤講師。

使用楽器はGuarneri del Gesu(1742)。



●ご予約・お問い合わせ株式会社 ILA (渋谷美竹サロン) 03-6452-6711(平日 10:00-18:00)、070-2168-8484(繋がりにくい場合) Webサイト: <https://x.gd/8zEBs>

〈プログラム〉
L.v.ベートーヴェン:ヴァイオリン・ソナタ 第2番 イ長調 Op.12-2
N.メトネル:ノクターン 第3番 ハ短調 Op.16-3
J.S.バッハ:シャコンヌ～ 無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第2番より*
D.ショスタコーヴィチ:前奏曲とフーガ 第24番 ニ短調 Op.87-24**
J.ブラームス:ヴァイオリン・ソナタ 第3番 ニ短調 Op.108
(*黒川ソロ **秋元ソロ)

*やむを得ない事情により日時・内容等の変更、中止等がある場合があります。

2025年
9月7日(日)

開場 14:30/開演 15:00

入場料:会員4,500円(座席指定可)/
一般5,000円/学生2,500円(全席自由席)



Shibuya
Mitake
Salon



123

Shibuya Mitake Salon (vol.183)

8th ANNIVERSARY



黒川侑&秋元孝介 デュオリサイタル

8th
ANNIVERSARY

2025年9月7日(日)開場 14:30/開演 15:00

入場料:会員4,500円(座席指定可)/一般5,000円/学生2,500円(全席自由席)

123
Shibuya Mitake Salon (vol.183)

独奏の極み、対話の深み 二人の美意識が響きあう——黒川侑 × 秋元孝介

黒川侑のヴァイオリンには、まるで繊細な糸で緻密に刺繡を施すような、丁寧な音の積み重ねが基盤として感じられる。

だが、その刺繡は単なる細工にとどまらず、やがて一枚の絢爛たる着物のように仕上がり、そこには繊細さとダイナミズムとが、互いを損なうことなく見事に調和している。

音が外へ放たれるのではなく、内に充満しながら、静かに、しかし確固たる音楽となって滲み出でてくるような様式だ。

だからこそ、バッハの無伴奏、なかでも《シャコンヌ》のような作品において、彼の演奏がいかに際立って傑出したものとなるのか——

そうしたバッハを、ずっと待ち望んでいたのである。

秋元孝介のピアノには、明晰な技巧と、マイスターのような技が調和し、精緻な手さばきがある。

虚飾を一切排し、自己陶酔を感じさせることもなく、細部にいたるまで計算され、構築されているにもかかわらず、その音楽は不思議なほど自然な流れを保ち、一本の太い線となって、最後までぶれることがない。

それはまるで、巨大な氷山にアイスピックを打ち込みながら、その中から緻密な彫刻を削り出していくような——

しかも、その削り落とされた氷片でさえ、結晶が美しく輝いている。

そんな情景が思い浮かぶような、独特な魅力あるピアノ演奏だ。

そんな彼が、ピアニスト人生を通じて弾き続けたいと語る作曲家が、メトネルである。

今回、そのメトネルの作品がプログラムに選ばれている、彼の美学とこだわりが刻まれている。

そんな二人の、妥協の余地がない、熟慮が重ねられたプログラムが、以下である。

L.v.ベートーヴェン:ヴァイオリン・ソナタ 第2番 イ長調 Op.12-2

N.メトネル:ノクターン 第3番 ハ短調 Op.16-3

J.S.バッハ:シャコンヌ ~無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第2番より*

D.ショスタコーヴィチ:前奏曲とフーガ 第24番 ハ短調 Op.87-24**

J.ラームス:ヴァイオリン・ソナタ 第3番 ハ短調 Op.108

(*黒川 **秋元)

クラシック音楽というのは、ある意味で、“対話”的な芸術である。

作曲家の自己との対話、その独白の結晶となっている作品と演奏家の対話、演奏者の自己との対話、そして、演奏者と聴き手である私たちとの対話である。

それが、外形的には、目の前のピアノとヴァイオリンの対話となって現れるのである。

この夜に並ぶ作品たちは、そうした“対話”を、さまざまな視点から示現してくれるだろう。



日本のトップクラスの若手演奏家が、

こだわり抜いた価値ある企画をお届けしていきます。

渋谷美竹サロン(美竹清花さん)が追求する

“本物の音楽”は、演奏者と参加者とわたしたちの、三位一体の努力と対話から生まれます。



ベートーヴェンのソナタ第2番には、若き日の気鋭と、どこか洒脱な遊び心が満ちている。

ラームス晩年の第3番には、老成と情熱が、まるで沈殿物のように濃密に息づいている。

同じ「ソナタ」と名のつく作品でも、書かれた時代も背景も異なる——それでもそこに通底しているのは、二つの楽器が語り合う歓びである。

イ長調とニ短調の“対話”を囲むようにして、静かに置かれた二つのニ短調のソロ作品。

バッハの《シャコンヌ》と、ショスタコーヴィチの《前奏曲とフーガ》。

ひとりで奏でるということが、どれほど深く孤独で、同時にどれほど自由で豊かなのか。黒川が、秋元が、それぞれの音で、その問を明らかにしていく。

バッハの《シャコンヌ》は、言わずと知れたヴァイオリン独奏の極北、これほど峻厳で、これほど至高の作品はない。

たった一人の奏者の手から、全宇宙が立ち上がる様が示されるバッハの到達した奇跡である。

ショスタコーヴィチの《前奏曲とフーガ》——これもまた、孤独な精神の闘いが五線譜に封じ込められた作品である。

秋元の手によって、どんな光と影がそこに浮かび上がるのか——どんな一期一会となるのだろう…

そして、メトネルのノクターン。

知る人ぞ知る作曲家かもしれないが、聴いてみればきっと納得できるだろう。

ロシアン・ロマンティズムの香りと、ドイツ的な理性の構築、その狭間に立つような響きが続く。

一見、ひっそりとした佇まいのなかにも、崩れ落ちそうなほど繊細な感情と、形態を保とうとする意志が拮抗する。

音楽という“瞬間の存在”でしかない夢さ、しかし、真実の存在感をも主張する確固たる意志がそこには示されている。

こうしたプログラムの妙味は、それぞれの作品の独自な“濃さ”にあるだけではなく、相互に反射し合い、ブレンドされながら、物語を紡いでいくところにある。

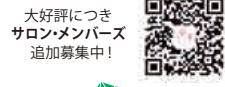
独奏と重奏、モノローグとダイアローグ、若さと老い、古典と現代、それらが、二人の音楽家——黒川侑と秋元孝介——によって、一本の太い線で描かれるのである。

一夜の一演奏会で、これほど多彩な音楽に出会えることもそう多くはないだろう。

確かにこの一夜の演奏会は、私たち一聴き手にとって、些細な一冒險になるに違いない。

(渋谷美竹サロン)

誕生。渋谷駅、徒歩2分
クラシック音楽サロン、宮益坂、



Shibuya
Mitake
Salon



●お問い合わせ

株式会社 ILA 渋谷美竹サロン (美竹清花さん)

東京都渋谷区渋谷1-12-8 (〒150-0002)

03-6452-6711 (平日 10:00-18:00)

070-2168-8484 (繋がりにくい場合)

Fax 03(3409)0188

QRコード

Webサイト